

# 東海林太郎音楽館 かわら版

NO, 5



季刊 東海林太郎かわら版 第5号

令和元年6月24日(月)

発行 東海林太郎音楽館

館長 佐々木三知夫

〒010-0921

秋田市大町2-1-11

TEL/FAX 018-823-5145

E-mail [taro@donpu.net](mailto:taro@donpu.net)

<http://www.donpu.net/>(ふるさと呑風便)

## 琴線(きんせん)

この春、東海林太郎音楽館に一通の封書が届いた。兵庫県高砂市の田中唯介さんからである。中を開いて見て驚く。93歳の田中さんの母親は大連時代の東海林太郎家と家族づきあいをされていた。それを示す東海林太郎からの手紙の写しが同封されていた。すぐに田中さんに電話。田中さん曰く、「地獄のような4年間のシベリア抑留時代に抑留ドイツ人からアコーディオンを習った。郷里に引き上げてから楽器屋を経営し、大好きな東海林太郎先生の歌、国境の町などを丸いメガネと髪カツラで弾き、唄い語ってまいりました。是非、秋田を訪れ、東海林先生にお礼を申し上げたく、お墓参りをして音楽館を訪ねたい」



3月26日。秋田駅に田中さんをお迎えし、真つ先に東海林太郎の菩提寺・西船寺にご案内し、東海林太郎音楽館でお話をお聞きし、深い感銘を受けた。

その後、田中さんから関西地元紙に掲載された大津市の82歳の方の投書(2019・1・12付)も送られてきた。

「紅白の楽しみも過去のものになり、寂寥感ひとしおだ。横文字のグループ名で横文字の歌を1クラスほどの大人数で歌う。歌が主なのかダンスが主なのか。

歌詞もテンポが速く、意味不明だ。

家にテレビもなかった時、父に東海林太郎の公演に連れて行ってもらった時の驚きは今も脳裏に焼き付いている。地味な背広姿で、直立不動のまま琴線に触れる歌声を聴かせてくれた。  
演歌華やかな時代に育った私は、横文字を理解しようと努力しても、鼓膜がそれを拒否する。日本の歌を聴いているのか外国の歌なのか分からない傾向は年強まるばかりだ。(以下略)

琴線。久し聞かない言葉である。

そういえば私もNHKの紅白歌合戦をここ数年、聴いていないし見てもいない。大金をかけて派手な歌手の衣装やアクロバットのような動きを見ても楽しくもない。大津市の方と同じ心境なのだ。  
東海林太郎さんの歌に「琴線」を感じるの、その歌に真摯な研究心と並々でない努力があるからだろう。

東海林太郎後援会誌に「或る日の感想」と題したような想いを述べている。僕は例えば、赤城の子守唄を唄う時、「流行歌赤城の子守唄」を歌うとは思わない。赤城の子守唄としての最高の表現をしようと努力する。ベートーベンの「神の栄光」を歌う時と同じ態度である。シューマンの失恋の歌をうたい、シューベルトの恋の歌をうたう時、みな然り。山田耕筰然り。麦と兵隊然り。同じ歌い方をするといいのではない。(そんなことをしたら大変である)

その歌曲に対する心構えが同じだといふのである。その歌曲の持つ内容の、

最高の芸術的表現をしようと心を砕くのである。(中略)

そこで僕のいおうとすることは「僕は常に音楽そのものを研究し、修練しているのである」ということであるが、それが流行歌としてはやるものであるならば、僕はおのずから、その歌謡を作った詩人、作曲家の意図し要求している歌の心をつかんで、所謂、流行歌風に歌っているのであろう。僕はその歌曲は、それが最高の表現であると信じて歌っているのである。

田中唯介氏は近く、「唯生論」を出版予定。そしてこの夏、秋田市で音楽会開催を予定している。

来年度中には、新秋田県民会館が開館される。会館裏にあった胸像は斜め向かいの平野政吉美術館跡に移転される。この機会を逃さず、胸像から東海林太郎直立不動像建立を全国に呼び掛けたい。



「努力、友情、歌一途」の東海林太郎の人間性を後生に伝えるためである。

田中唯介さんのコンサート名は「東海林太郎直立不動像建立チャリティ・田中唯生音楽会」として、琴線にふれるコンサートとしたい。